

4年で進路を決めて卒業するのはどんな学生か？

——ある私大での追跡調査——

山 口 洋

〔抄 録〕

近年「大学生の大半は4年間で進路を決めて卒業する」という従来の常識が崩壊しつつある。こうした状況下で、4年で進路決定・卒業する学生とその他の学生との分化を生み出す要因は何か。本稿は社会化論と社会ネットワーク論に依拠した3つの仮説をたて、ある私大の社会学科3回生（調査終了時は4回生）全員に対する追跡調査のデータを分析した。その結果、3回生4月時点で①将来志向の価値観、②学科内における豊富な友人ネットワーク、③年長者との広範囲な進路相談ネットワーク、を有する学生ほど4年で進路決定・卒業しやすいことが示された。

キーワード 大学生、進路決定、予期的社会化、社会ネットワーク、追跡調査

1. はじめに：大学生の進路決定状況

1990年代の長期不況とともに大学生の就職状況は急速に悪化し⁽¹⁾、入試難易度の高い大学や、需要の高い職業資格と直結した一部の専門領域を除けば「4年で卒業、即就職」という常識は既に崩壊しつつある。かつて大学生の進路問題といえば進路をどこに決めるかが中心だったが、今や4年で「無事」進路決定し卒業できるのかが中心となりつつある。こうした情勢において大学生の4回生終了時点（3月時点）での進路決定状況は大まかに以下の3つになる。

- ① 卒業を決定していない（未卒業）
- ② 卒業は決定したが、進路先は決定していない（進路未定・卒業）
- ③ 卒業も進路先も決定している（進路決定・卒業）

かつては4回生のうちに進路先と卒業を決定しているのが普通だったが、最近では、どちらか一方もしくはその両方が決定できないことが多くなっている。では、4年で進路を決めて卒業するのはどんな学生なのだろうか。そうでない学生と比べてどこが違うのか。

本稿では、上記3種類の進路決定状況の分化を生み出す要因について、ある私立大学の社会学科3年生223名全員を対象とする追跡調査のデータを基に考える。すなわち当該学生の3年生4月時点⁽²⁾での質問紙調査（記名式）のデータと、2年後、4年生3月時点での進路決定状況を調べた資料とを照合し、前者で後者を説明することを試みる。

特定大学の特定学科が事例なので、入試難易度・専門領域・所在地等による進路決定状況の違いは本稿の射程外となる。同じ大学で同じ領域を学ぶ学生達の進路決定状況を分ける原因を探ることが本稿の眼目である。本稿の分析対象は、大都市圏にある平均的な入試難易度の私大（共学）であり、一般企業志望者が多数を占める社会科学系の学生である。本稿の事例は、その種の学生達の進路決定プロセスを理解する際の参考になるだろう。

2. 分析枠組

2.1. 先行研究と本稿の射程

大学生の4年生終了時点における進路決定状況に影響を及ぼす社会的要因は、非常に多様だと思われるが、大まかには次の3つが挙げられる。第1に所属大学・専門領域である。所属大学の入試難易度別の進路先の違いは、学歴社会研究で古くから報告され、最近でもその傾向は明確である（荻谷編1995, 岩内・荻谷・平沢編1998）。また当然ながら職業資格と直結した専門領域とその他の領域とでは格差がある。第2に学生の社会的属性である。例えば両親の学歴・職業、出身地域などは第1の要因と絡み合いつつ、学生の進路決定に影響を及ぼす。また、一般企業への就職活動では「性差」が特に問題にされてきた。先述の通り本稿の事例は第1の要因が完全に同一の学生達であり、第2の要因においても似た特性を持つ学生達なので、これらの要因の分析は射程外となる。第3に学生の価値観やライフスタイルにまつわる要因が重要であり、これが本稿の分析の中心課題となる。同じ大学で同じ専門領域を学ぶ学生にも、色々な考え方やライフスタイルの学生がいる。4年で進路決定し卒業するのはどんなタイプか。本稿では、社会化論および社会ネットワーク論に依拠して次節以下、3つの仮説をたてる。

ここで先行研究を簡単に整理し、本稿の特色をはっきりさせておく。大学生や短大生の進路決定を扱う近年の主な調査研究は、教育心理学系の研究と社会学系の研究とに大別できる。前者は、発達心理学の観点または進路指導の立場から、学生の進路決定に関連する心理を主題としてきた（都築2001, 浦上1996, 下山1992）。当然ながら、こうした研究は、学生の社会環境や社会的特性よりも、心理特性に焦点を合わせており、本稿の社会学的問題関心とはやや異質である。一方、社会学系の調査研究としては、大学別・社会階層別の進路の違いに焦点を合わせる諸研究が目立ち（荻谷編1995, 岩内・荻谷・平沢編1998）、同一大学内の進路分化に着目した研究は意外に少ない。最近の例外としては安田（1999）の書物があり、本稿の問題関心にや

や近いが、この研究は3回生後半から4回生にかけての就職活動に主な焦点があり、それ以前の学生生活と進路選択との関連性については詳細な分析が無い。本稿は、そこに焦点を合わせ、しかも従来の社会学的概念を踏まえたアプローチを試みる。

2. 2. 大学生の進路決定と予期的社会化

大抵の学生は4年間で進路先と卒業を決定したいと考える。しかしこの2つの課題は時として矛盾する。大学の勉強と、就職活動や採用試験の勉強とがうまく両立しないことがある。特に、単位取得が職業資格と直結しないような領域の学生には、頭の痛い状況がしばしば起きる。

大学生の進路決定に関するジレンマは、マートン(1957)の予期的社会化(anticipatory socialization: 将来を見越した社会化とも訳される)という概念でうまく整理できる。学生にとって進路決定行動とは、大学から進路先(多くの場合就職先)へと所属集団を移動することに他ならない。日本では在学中の進路決定が望ましいとされ、大学に所属しつつ未所属の進路先の価値や行動様式を(最低限、外見上は)先取りする必要がある。例えば一般企業への就職活動では、企業が要求する価値観や態度を、採用試験の面接担当者にアピールしなくてはならない。このように移動先の集団の価値を予め内面化することを、予期的社会化という。

卒業生の大半が同一の職業に就くような、ある種の専門学校の学生にとって、予期的社会化はさほどの難題ではないだろう。この種の学生達は進路の大枠を既に決定しており、後は知識、技能、資格を獲得し具体的な職場を決めるだけである。また同僚の大半は将来の同業者に他ならず、学校内で培う人間関係は進路の実現過程で大いに活かされる。よってこの種の学生たちは「現在」所属する学校を準拠集団とし、そこで要求される行動様式や価値を身に付ければ充分である。そうすれば自然と「将来」所属すべき職能集団へと社会化されることになる。

ところが職業資格とうまくリンクしない専門領域を学ぶ多くの大学生達にとって、職業生活への予期的社会化はしばしば難題となる。第1に進路志望そのものが不明確な場合が多く、どんな集団のどんな価値・行動様式を先取りすべきかが明確でない。第2に進路志望が絞り込まれ、習得すべき事柄が明確になってきても、現在所属する大学でそれが充分習得できるとは限らない。例えば大学で要求される知識や態度と、採用試験の面接担当者が要求する知識や態度とは必ずしも一致しない。また人間関係をとってみても、大学時代の同僚が同業者となることはむしろまれである。従って多くの大学生は、現在所属している学校集団だけを準拠集団とするわけにはいかず、それだけ予期的社会化が困難な課題となりやすいだろう。

2. 3. 大学生のネットワークと進路決定

では卒業と職業資格とが直結しない多くの大学生にとって、進路決定の為に必要なサポートネットワークはどんなものだろうか。ほとんどの場合、進路決定の為に「卒業」が大前提と

なる。よって大学内部に人間関係の根をはることは、やはり重要である。特に同じ専門を学ぶ同年輩の学生たちのサポートは貴重である。ノートやプリントの貸し借りをしたり、連絡事項を教えあったりすることによって、単位取得が容易になる。また同じ専門を学ぶ学生と懇意になり、楽しみや情緒的サポートを与え合う仲になれば、授業への出席も苦痛ではない。言い方は悪いが「教室が待ち合わせ場所」になれば講義もさほど苦にならない。すると出席率が上昇し、自然と講義の理解度も増して単位取得も容易になり、4年で無事卒業となる。

しかし「就職」については、この種の人間関係だけでは不十分である。ほとんどの学生（社会人学生を除く）は就職経験が無く、同年輩の学生から体験談を引き出すことはできない。もちろん進路選択・進路決定の過程において、同じ立場の学生同士で、様々な情報交換をしたりすることは有益だろう。しかし、明確な資格取得型の学部・学科を除けば、学生達の進路先は様々であり、友人同士での情報交換が成立しないことも多い。例えば、一般企業志望の学生と、公務員志望の学生とでは、それほど有益な情報交換は成り立たない。

むしろ、学生達にとって頼りになるのは両親や教師、また、進路決定プロセスを経験している大学の先輩といった人達ではないだろうか。こうした人達に相談に乗ってもらい、体験談をきいたりすることによって、学生達は進路決定活動にまつわる様々な疑問・不安・迷いを解消できよう。そもそも学生にとって、進路決定とは「同年輩」の者で主に構成される仲間集団を文字通り卒業し、「年長者」によって主に構成される職業集団へと仲間入りすることである。よって、大学を卒業する為には、同年輩の者たちのサポートが役に立つが、就職する為には、年長者とのネットワークが必要とされるのではないか。この2種類のネットワークをバランスよく有する者が、4年で「無事」進路決定できるのではないだろうか。

以上の考察を3つの仮説にまとめよう。

仮説1：前節の推論によれば大学生が4年で進路決定を果たすには「現在志向」ではなく「将来志向」（NHK 放送文化研究所編 2000）の価値観を持つ必要がある。職業資格と直結する専門学校の学生は「今を生きる」ことが即「将来を見据える」ことになりうるが、多くの大学生は自分の将来像を、ある程度自らの想像力で描き、それに向けて自らの意志で活動せざるを得ない。よって将来志向の価値観、つまり現在を享受するよりも将来に備えることを優先する価値観を身に着けている学生が特に有利になるだろう。

仮説2：本節の推論によれば「学科内の友人ネットワーク」をより豊富に持っているほど、4年で「無事」卒業しやすい。すなわちこの種のネットワークは、冒頭で述べた進路決定状況の3種類のうち、主に「①未卒業・②③卒業」の分化に影響を及ぼすだろう。

仮説3：本節の推論によれば「年長者とのネットワーク」の有無・多少が、①②進路未決定（未卒業者含む）と③進路決定の分化に影響を及ぼす。現代の若者にとって、進路決定は同年輩の者を中心とする学校集団から、年長者からなる進路先集団へ移動することだからである。

3. データの概要

3.1. データ収集法と被説明変数

本節ではデータ収集法の詳細と被説明変数について順を追って説明する。まず2000年の4月に、関西圏の、ある私立大学の社会学科3回生223人全員を対象に記名式質問紙(自計式)を用いた集合調査を行った。調査場所は必修科目である演習(14コマ開講)の場を利用させて頂いた。回収率は93.3%(有効回答208)であった。説明変数のほとんどはこの3回生4月時点での調査データから構成される。半年後の2000年9月にも同じ対象者に対して同様の調査を行ったが、回収率が81.6%(有効回答182)とやや低く、4月のデータと合併してパネルデータを構成するとさらに回答率が低下(78.9%)する。よってこの9月のデータは必要に応じて補足的に用いる。

その後、この学生達が4回生の終わりを迎えた2002年3月時点での進路決定状況を、各種の資料(同窓会名簿、その他)から調べた。この他、対象学生の入学形態(推薦入試、一般入試など)や2000年4月から2002年3月までの学籍異動(休学、退学など)に関する資料も入手した。これらの資料から得られたデータと、既述の質問紙調査のデータを照合・合併することにより、どんな経路で入学した学生が、3回生4月時点でどんな意識や行動を示し、4回生終了時点でどんな進路決定状況にあるのかについて、一貫した分析が可能になる。

本稿の分析の被説明変数は2002年3月時点での大まかな進路決定状況であり、冒頭で述べた通り、それは①卒業未決定(26人)、②進路未定・卒業(65人)、③進路決定・卒業(126人)の3種類である。ここでは、2000年4月時点の3回生223名のうち2002年3月までに退学した6名(うち4名が有効回答)は対象外とした。ただし2002年3月までに休学した学生5名(うち4名が有効回答)は分析対象とし「卒業未決定者」のカテゴリーに含めた。ちなみに休学理由は多様だが経済上・健康上の問題を事由とした者はいなかった。

なお進路先の細かな分化(就職・進学の違い、就職先の種類など)は、本稿では被説明変数としない。本稿の関心は、論文タイトルの通り「4年で進路を決めて卒業するのはどんな学生か?」である。ただし進路志望先の種類によって、大学在学中に進路決定することの容易さ、および、その必要性の度合いは異なる。例えば民間企業志望者は(選り好みしなければ)在学中に比較的進路決定しやすく、またそうすることが有利な就職口を得るための条件である。一方、公務員・教員志望者は在学中に採用試験に合格しないことが多いが、そうであってもその後の合格可能性や就職条件そのものが(試験勉強を継続できれば)さほど悪化するわけではない。よって3.3節で述べるように、仮説検証の際には志望先の種類(3回生9月時点)が進路決定時期に及ぼす影響をコントロールした分析も行うことにした。

3. 2. 仮説に関わる説明変数の構成

仮説1の検証に用いる質問項目は『日韓中における社会意識の比較調査』（佛教大学総合研究所編2001）の項目をそのまま利用したものであり、これは元々NHKの全国意識調査（NHK放送文化研究所編2000）の質問項目を一部改変して作成された。すなわち「人の暮らし方についていろいろな考え方があります。あなたの考えに一番近いものを1つだけ選んで番号に丸をしてください」と問い、7つの選択肢から回答を選ばせるものである。「その他」「わからない」を除く主な5つの選択肢は以下のとおりである。

1、その日その日を自由に、楽しく暮らす。2、しっかりと計画をたてて、豊かな生活を築く。3、身近な人たちと、なごやかな毎を送る。4、自分のことだけを考えずに、いま困っている人がいたら手をさしのべる。5、みんなと力を合わせて社会をよくする。

NHKの全国調査に倣い選択肢1と3を現在志向、2と5を将来志向に分類した。選択肢4には「いま」とあるが、意味の力点は「いま」の享受ではなく改善にあり、ここでは将来志向に含めておく。こうして選択肢2・4・5を将来志向（＝1）、1・3を現在志向（＝0）とする2値変数ができる。なお「その他」「わからない」は欠損値とした。

仮説2は、学科内に豊富な友人ネットワークを持つ学生ほど卒業しやすいというものだが、ここで、ネットワークが「豊富」というのは、学科内に友人が多い、つまり友人ネットワークのサイズが大きいという意味である。友人数の質問項目は人数を直接尋ねるもので⁽³⁾、大谷（1995）の質問項目から作成した。「あなたが面識を持っている〇〇大学社会学科の学生を〈知り合い〉と〈友人〉の2つに分類するとすれば、あなたが考える〈友人〉は何人になりますか」と尋ね、予備調査（1999年度秋に実施）の結果を参考に5つの選択肢を用意して、そこから選ばせている。すなわち①0～2人②3～5人③6～9人④10～14人⑤15人以上の5つである。本稿では、この①～⑤の選択肢番号をそのまま量的変数として用いた。

仮説3の検証に用いる質問項目は（1）心を打ち明けて話せる人、（2）その人のようになりたいと思う人、（3）進路や就職について相談できる人、のそれぞれについて、13種類の人物を示して複数回答を求めたものである。これらの人物のうち、以下列記する選択肢を「年長者」とみなし、選択数の多い人ほど年長者とのネットワークが豊富だと考えることにした。年長者とは「1、父、2、母、7、学科内の先輩、8、他学科の先輩、9、小中高校時代の先輩、10、アルバイトの先輩・上司、11、大学の教師、12、小中高校時代の教師」の計8項目である。ちなみに年長者以外の選択肢は、「3、兄弟姉妹、4、学科内の友人、5、他学科の友人、6、学外の友人、13、その他・有名人等」の計5項目である。

結果をやや先取りしていえば、進路決定状況と関連したのは、質問項目（3）から構成された、進路・就職に関する相談ネットワークだけであった。よって以下、年長者とのネットワークを論ずる際には、この（3）への回答だけを取り上げる。

3. 3. その他の要因と進路決定状況

仮説の検討の際、その他の変数の影響をできるだけコントロールする必要がある。そこで、進路決定状況と関連するその他の変数について概観しておく。

2000 年 4 月の調査票のほぼ全項目、およびその他の資料から得られたデータを検討した結果、進路決定状況と顕著な関連がみられたのは、性別、授業出席率、入学形態の 3 変数であった。出身地、居住形態（自宅・下宿）、兄弟姉妹構成、父母の学歴・職業などの基本属性と進路決定状況との間には顕著な関連がみられなかった。またこの調査票では、進路選択の進捗状況に関する自己認識も二種類の質問項目群⁽⁴⁾によって尋ねているが、意外にも、こうした認識と 4 年生終了時点での実際の進路決定状況との間には、顕著な関連がみられなかった。

性別と進路決定状況との関わりをみると、未卒業者の割合は男性で 16.6%，女性で 0% であり、退学者を除けば女性は未卒業者がゼロだった。しかし進路未決定のまま卒業した者の割合は、男性で 24.8%，女性で 43.3% と女性で高い。結果的に、4 年で進路を決定して卒業する者の割合は男女でほとんど差が無い（男性 58.6%，女性 56.7%）。

また当然ながら、授業出席率（自己評価：3 件法）が低い者ほど未卒業者の割合が高く「低い方」で 24.1% 「平均程度」で 5.9% 「高い方」で 3.5% であった。ただし進路未決定のまま卒業する者の割合は、授業出席率が「低い方」で 33.3% 「平均程度」で 32.4% 「高い方」で 27.1% と大差は無い。出席率は、学科内友人関係の直接的な効果を推定する為に、是非ともコントロールしておきたい。仮説 2 の説明で述べたように、友人数が出席率を規定する可能性もあるが、一方で、出席率を媒介にして友人数と卒業の可否が見かけ上の相関を示す可能性もある。つまり、出席率が高ければ学科内に友人が増えるのは当然であり、出席率が高ければ、友人数によらず卒業しやすいと考えられるからだ。したがって、同じ位の出席率の者同士の間でも、友人数の効果が観察できて初めて、仮説 2 が支持されたと考えるべきである。

さらに本稿のデータでは、入学形態⁽⁵⁾、つまりどの選抜を経て入学したかが、4 年生終了時点での進路決定状況と関連していた。4 年で進路決定して卒業した者の割合は、公募制推薦による入学者（分析対象 28 人）で 89.3% に達し、その他の学生の値（53.4%）を大きく上回った。公募制推薦による入学者には、卒業未決定者は皆無であり、進路未決定の卒業生の割合も 10.7% とその他の学生の値（32.8%）を大きく下回った。公募制推薦による入学者は人数的には多くないが、他の学生との異質性は明らかである。よってこの要因もコントロールしたい。

最後に 3.1 節で述べた進路志望先の影響だが、3 年生 4 月時点での進路志望（就職か進学か、民間企業志望なのか、公務員志望なのかなど）は、意外にも 2 年後の進路決定状況と有意な関連を示さなかった。恐らくこの時期の学生達の進路志望は、まだ揺れているからだろう。これに対し 3 年生 9 月の調査で「民間企業志望」だった学生は 4 年で進路決定・卒業する割合が 75.0% と、その他の学生の値（48.9%）を大きく上回った。3 年生秋頃に進路志望

4年で進路を決めて卒業するのはどんな学生か？（山口 洋）

が固まってくるからだろう。そこで3回生9月時点での進路志望をコントロールした分析も、補足的に行なう。9月の調査は回収率が低く（81.6%：182票）、4月のデータと合併してパネルを構成しうるのは78.9%（176票）となる。しかし4月の全回答者とパネル構成者の間には、進路決定状況の差異⁽⁶⁾がほとんどみられないので、パネルデータの分析も有意義だと判断した。

4. 仮説の検討

4.1. ロジスティック重回帰分析

前節でみた諸変数の影響をコントロールした上で、仮説の有効性を検討する為、ロジスティック重回帰分析を行った。統計パッケージはSPSS 11.5 Jを利用した。

既述の進路決定状況の3分類のうち、①②を「進路未決定者」③を「進路決定者」として2値変数（③＝1，①②＝0）を構成しこれを被説明変数とした。また同じ変数を用いて、卒業者のみ（つまり①を除く）の分析を行うことにより、卒業者中の③進路決定者と②未決定者の分化を捉えることにした⁽⁷⁾。投入する説明変数は将来・現在志向（将来＝1，現在＝0），学科内友人数（数量扱い），年長者との進路・就職相談のネットワーク（数量），授業出席率（数量），性別（男性＝1，女性＝0），入学形態（公募制推薦＝1，その他＝0）である。

その結果をまとめたのが表1である。いずれのモデルの分類予測（0.5基準）も75%前後的中率を示している。つまり、学生生活半ばの3回生4月時点の情報で、4回生終了時の進路決定状況が7～8割方予測できたことになる。表左側の①②進路未決定者と③進路決定者との分化を説明するモデルでは将来志向，学科内友人数，年長者との相談ネットという仮説の3変数の効果が全て有意（5%水準）だった。回帰係数の符号も全て正で，予想通りの方向性を示した。一方表右側の②進路未決定・卒業と③進路決定・卒業の分化を説明するモデルでは，仮説の3変数のうち学科内友人数の効果が有意ではなく，将来志向，年長者との相談ネットワークの効果が有意であった。ここから学科内友人数は，あくまで②③卒業・①未卒業の分化と関連し，卒業者中の②進路未決定と③決定の分化にはあまり関連しないものと推測できる。

また，3.3節で述べた通り，3回生9月時点で「民間企業志望」を表明していたか否か（民間企業志望＝1，それ以外＝0）を説明変数に加え，同様のロジスティック重回帰分析を2種類行なったが，分析結果は表1と大差無かった。すなわち進路決定状況の①②と③の分化を説明するモデルでは，仮説に関する3変数の効果が全て有意であり，②と③の分化のみを説明するモデルでは，学科内友人数の効果が有意ではなかった。詳しくは末尾の〔付表1〕を参照されたい。では表1を参照しつつ，各仮説について図表で詳しくみていこう。

表 1 ロジスティック重回帰分析

| 説明変数 | 被 説 明 変 数 | | | | | |
|----------|---------------|---------|-------|--------------|---------|-------|
| | ①②進路未決定と③進路決定 | | | ②進路未決定と③進路決定 | | |
| | B | Wald | 有意確率 | B | Wald | 有意確率 |
| 将来志向* | 1.398 | 10.355 | 0.001 | 1.603 | 10.437 | 0.001 |
| 学科内友人数 | 0.375 | 4.821 | 0.028 | 0.235 | 1.738 | 0.187 |
| 年長者相談ネット | 0.494 | 10.703 | 0.001 | 0.531 | 10.238 | 0.001 |
| 授業出席率 | 0.745 | 9.679 | 0.002 | 0.598 | 5.361 | 0.021 |
| 性別* | 0.518 | 1.500 | 0.221 | 0.764 | 3.133 | 0.077 |
| 公募制推薦* | 2.188 | 7.762 | 0.005 | 1.870 | 5.623 | 0.018 |
| 定数 | -4.100 | 19.466 | 0.000 | -3.399 | 11.690 | 0.001 |
| N | | 176 | | | 158 | |
| カイ 2 乗値 | | 57.900 | | | 44.803 | |
| -2 LL | | 178.672 | | | 155.398 | |
| 自由度 | | 6 | | | 6 | |
| 有意確率 | | 0.000 | | | 0.000 | |
| 正分類確率 | | 0.744 | | | 0.785 | |

*印の説明変数は 2 値のカテゴリ変数，その他は全て量的変数

4. 2. 将来・現在志向と進路決定状況

図 1 は，当該の質問項目への回答により，進路決定状況がどのように違うかを示したものである。上の 3 つが「将来志向」の価値観であり，そのすぐ下の 2 つが「現在志向」の価値観である。将来志向の者の方が，4 年で進路決定して卒業する学生の割合が高い。図 1 を見る限り，①未卒業者の割合と将来志向との関連性は不明確だが，②進路未定・卒業者の割合は将来志向の者に明らかに少ない。仮説 1 は支持されたといえよう。

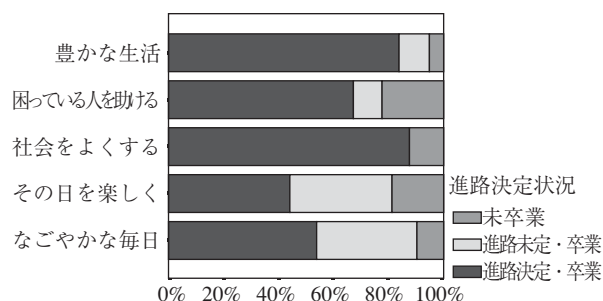


図 1 将来志向 (上 3 つ)・現在志向 (下 2 つ) と進路決定状況

4. 3. 学科内友人数と進路決定状況

図 2 の通り，3 年生 4 月時点で学科内友人数の多い学生ほど 4 年で③進路決定・卒業しやすい。ただし図 2 をよくみると，友人数別の傾向がより明確なのは①未卒業者の割合である。3 回 4 月時点で学科内に 10 人以上友人がいる者は，全て 4 年で卒業している。一方，②進路未

4年で進路を決めて卒業するのはどんな学生か？（山口 洋）

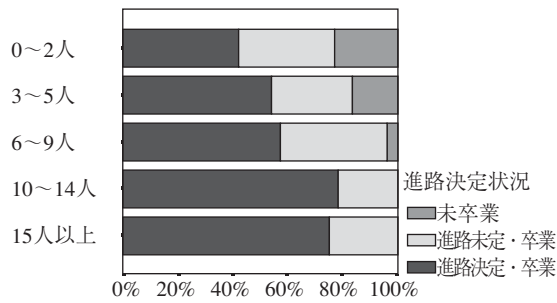


図2 学科内友人数と進路決定状況

定・卒業の割合は友人数別の傾向があまりはっきりしない。つまり、学科内友人数は、①未卒業と②③卒業の分化にのみ関連するようである。こうした傾向は、表1の分析結果で裏付けられており、仮説2が述べる通りである。学生としての「今」を学科の友人達と（恐らくは楽しく）過ごすことは卒業にはつながるが、「将来」の進路決定には必ずしもつながらない。

4.4. 年長者との相談ネットワークと進路決定状況

図3にみるように進路・就職について様々な年長者と相談できる人ほど、4年で③進路決定・卒業しやすい。表1で確認したとおりである。図3を見る限り、①未卒業者の割合と相談

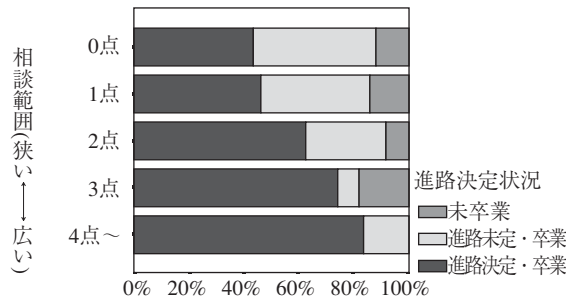


図3 年長者との進路・就職相談ネットワークと進路決定状況

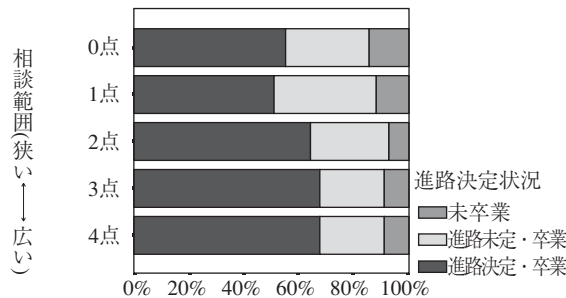


図4 非年長者との進路・就職相談ネットワークと進路決定状況

範囲との関連は不明確であるが、②進路未定・卒業者の割合は、相談範囲が広がるにつれ、概ね低下傾向にある。一方、図4で分るように「年長者以外」との進路相談ネットワークと、進路決定状況との間には、図3ほど明確な関連性は見られない。こうしたことから、仮説3は、進路・就職に関する相談ネットワークに限定すれば、支持されたといえる。

4.5. 入学形態の効果について

既述の通り公募制推薦による入学者は、4年で進路を決めて卒業する者の割合が圧倒的に高かった。表1の2つのモデルでもこの効果が裏付けられている。これをどう解釈すべきか。一部は仮説1で説明可能である。「将来志向」の学生の割合は公募制推薦の学生で52.0%、その他の学生で29.9%だった。つまり公募制推薦入試の学生は、将来志向の学生を多く含むので早期に進路決定しやすいとの説明が成り立つ。また技能検定や部活動の実績を重視する選抜方式や、大学志願時期（すなわち高校時代の進路決定時期）の早さを考えると、公募制推薦の学生には、元々将来志向の者が集まるのだろうと推測できる。

しかし表1によれば「将来志向」を含む他の変数をコントロールしても「公募制推薦」の効果は残る。よって別の解釈も必要である。今のところ裏づけに乏しいが次のような仮説が列記できる。(1) 公募制推薦の学生には不本意入学者が少なく、全体にモラルが高いので、卒業や進路も順調に決まるのではないか。ちなみに③進路決定・卒業者の割合は、一般B入試（最終の入試）での入学者で最も低かった。(2) 公募制推薦の選抜方式は、小論文や面接での自己表現が重視されており、一般企業への就職活動にやや類似している。公募制推薦の学生は、自分が高校時代に経験済みのやり方で、大学でも早めに進路決定できたのではないか。

5. 結 論

4年で進路を決めて卒業するのはどんな学生か？本稿は社会化論と社会ネットワーク論に依拠した3つの仮説をたて、ある私大の社会学科3回生全員に対する追跡調査のデータを分析した。その結果、3回生4月時点で①将来志向の価値観、②学科内における豊富な友人ネットワーク、③年長者との広範囲な進路相談ネットワーク、を有する学生ほど4年で進路決定・卒業しやすいことが示された。

大学生、特に卒業が職業資格に即結びつかないような専門領域の学生は、学生としての現在を充実させることと将来に備えることの間にギャップが生じやすい。よって多くの大学生には、自分の将来像をある程度、自らの想像力で描き、それに向けて自ら活動する力が必要とされる。本稿のデータにおいて、「現在」よりも「将来」を重視する価値観を持つ者ほど、早期に進路決定していたのは、こうした事情によるのではないか。

もちろん大学を卒業できなければ、多くの場合、次のステップには進めない。よって大学で

同じ専門を学ぶ友人達と広く交わることの効用は無視できない。しかし学科内の友人数は②進路未定・卒業と③進路決定・卒業との分化にはほとんど無効果だった。やはり学生としての「今」を同僚と共に過ごすことと、将来を見越した社会化過程とは必ずしも一致しないのである。

多くの大学生にとって進路決定とは、主に同年輩の者で構成される学校集団から、年長者ばかりの進路先集団へと移動することである。だから進路・就職に関して年長の相談相手を広く有する学生が進路決定の際有利である。確かに同年輩の友人にも進路や就職の相談はできる。対象学生の6割は学科内や学外の友人と相談できると答え、4割は他学科の友人に相談できるとした。学生にとって進路や就職に関する主な相談相手は、むしろ同年輩の友人である。しかし同年輩の相談相手の存在は、4回生終了時に実際に進路を決定したか否かには無効果だった。効果を持つのは、母親、小中高校時代の教師、大学の先輩（就職活動中の4回生を含む）など、外の世界を知る経験者達との相談ネットワークである。こうした人々（特に先輩や教師）は本人にとって必ずしも親しい存在ではない⁽⁸⁾。やはり未知の世界への橋渡しとなるのは弱い紐帯（Granovetter 1996）なのであろうか。

また、こうした進路分化のプロセスが、大学生生活半ばの3回生4月の段階で、既に相当進んでいる事実にも注目したい。入学形態、出席状況、将来志向の強さ、学科内友人数、進路を相談できる年長者の存在、こういったごく基本的なことを3回生4月の時点で調べると、4回生3月時点での進路決定状況をかなりの確率で予想できてしまう。

ただし、さらに普遍妥当性の高い結論を導くには、様々な大学の様々な専門領域を対象にした同様の調査データを検討する必要がある。大学生の進路選択に関するこの種の社会学的研究は未だ不十分である。大学生の就職難はここ10年ほどの現象であり、従来は大学入学時点が進路分化の終着駅とされていたからかもしれない。さらに付言すれば、学生の進路問題の全体像を把握するには、大学教育や学生だけを見ていてもだめである。学生の進路問題は、企業や団体の雇用慣行も含む日本社会全体の構造と深くかかわっている（玄田 2001）。本稿はこの大きな問題領域のうち、大学教育と学生生活に直接関わる一断面を照射する試みであった。

〔注〕

- (1) 1990年3月の大学卒業者の就職率は81%であったが、それが1995年には67.1%に落ち、さらに2000年には55.8%にまで落ちた。理工系で大学院進学率が上昇したのは事実だが、文系を含めた大学院進学率は、1990年に6.8%だったものが1995年に9.4%、2000年に10.7%になったに過ぎず、「進路未決定率」が急上昇したことは否定できない（文部科学省編 2003）。
- (2) ただし進路志望先の種類（民間企業就職志望であるか否か）が、進路決定時期に及ぼす影響をコントロールする為、3回生9月時点に行った同様の調査データも一部利用する。詳しくは、3.3節を参照。なお、これら2回の質問紙調査は、科学研究費平成11～12年度奨励研究A（課題名：パーソナル・ネットワークと進路選択、研究代表者：山口洋）の補助により行われた。詳細は山口（2001）を参照。

- (3) 山口(2003)はこうしたネットワーク調査法を「人数推定法」と呼び、その性質について論じている。
- (4) 進路選択の進捗状況に関する質問項目群は、大学生のアイデンティティ確立に関する発達心理学的研究(下山1986, 1992)を参考に2種類作成された。1つは最も広い意味での進路選択、つまり「生き方の選択」の進捗状況を問うもので、もう1つは、より具体的な職業選択の進捗状況を問うものである。前者は「私は、自分なりの生き方を主体的に選んでいる」「自分の生き方は、自分で納得のいくものである」「社会の中での自分の生きがいが増えてきた」という3つの文について「そう思う」から「そう思わない」までの4件法で回答を求めている。後者は5つの文に「そう思う」「どちらとも言えない」「そう思わない」の3件法で回答を求めるもので、各文は以下のとおりである。「できることなら職業決定は、いつまでも先に延ばし続けておきたい」「将来の職業のことよりも現在の学生生活を充実させるほうを優先している」「自分のやりたい職業は決まっており、今は、それを実現していく段階である」「将来やってみたい職業がいくつかあり、それらについていろいろ考えている」「職業決定のことを考えると、とても焦りを感じる」。
- (5) 入学形態の内訳は次の通りである。ここでの人数には途中退学により対象外となった者も含む。一般A入試93人(41.7%)一般B入試65人(29.1%)公募制推薦29人(13.0%)指定校推薦19人(8.5%)スポーツ推薦A7人(3.1%)スポーツ推薦B3人(1.3%)文科系推薦3人(1.3%)転籍・編入・指定校編入・留学編入が各1人計4人(計1.6%)である。
- (6) ①未卒業者割合は4月の全回答者で9.3%, パネル構成回答者で8.1%, 同じく②進路未定・卒業者は4月30.9%, パネル30.6%, ③進路決定・卒業者は4月59.8%, パネル61.3%であった。
- (7) なお, ①未卒業と②③卒業の分化については, 性別との関連が最も深く, 女性の未卒業者がゼロであった。しかし, まさにこの理由から, 性別変数を入れた推定値の計算がうまくいかなくなるため, ①と②③との分化を被説明変数としたロジスティック重回帰分析の結果は本稿では提示しない。
- (8) 3.2節で言及した「心を打ち明けて話せる人」のベスト3は学外の友人(75.7%が選択)学科内の友人(同52.5%)他学科の友人(同42.6%)であった。一方「進路や就職について相談できる人」として「母」「学科内の先輩」「他学科の先輩」「小中学校時代の教師」を挙げた人は, それぞれ挙げない人よりも③進路決定・卒業者が高かった(ϕ 係数5%有意)が, 「心を打ち明けて話せる人」としてこれらを挙げた人は順に39.1%, 6.4%, 11.9%, 7.4%であり, いずれも上記の同年輩の友人の値を大きく下回る。

〔文献〕

- 佛教大学総合研究所(編), 2001, 『日韓中における社会意識の比較調査』。
- 玄田有史, 2001, 『仕事の中の曖昧な不安』, 中央公論新社。
- Granovetter, M. 1995, *Getting a Job (2nd edition)*, The University of Chicago Press (渡辺 深 訳, M・グラノヴェッター, 『転職』, ミネルヴァ書房, 1996)。
- 岩内亮一・荻谷剛彦・平沢和司(編), 1998, 『大学から職業へII』, 広島大学 大学教育センター。
- 荻谷剛彦(編), 1995, 『大学から職業へ』, 広島大学 大学教育研究センター。
- Merton, R. K., 1957, *Social Theory and Social Structure*, The Free Press. (森 東吾・森 好夫・金沢 実・中島竜太郎訳, 『社会理論と社会構造』, みすず書房, 1961)。
- 文部科学省(編), 2003, 『文部科学統計要覧』。
- NHK 放送文化研究所(編), 2000, 『現代日本人の意識構造 第5版』, 日本放送出版協会。
- 大久保幸夫(編), 2002, 『新卒無業』, 東洋経済新報社。
- 大谷信介, 1995, 「『都市の状況』と友人ネットワーク:大都市大学生と地方都市大学生の比較研究」, 松本康(編), 『増殖するネットワーク』, 131-173頁, 勁草書房。

4年で進路を決めて卒業するのはどんな学生か？（山口 洋）

- 下山晴彦，1986，「大学生の職業未決定の研究」『教育心理学研究』34：20-30 頁。
 ———，1992，「大学生のモラトリアムの下位分類の研究」『教育心理学研究』40：121-129 頁。
 都筑 学，1999，「大学 2-4 年生の進路選択と時間的展望」『教育学論集』41：119-137，中央大学教育学研究会。
 ———，2001，「大学生の進路選択と時間的展望－縦断的調査データの分析－」，『教育学論集』43：95-124 頁，中央大学教育学研究会。
 浦上昌則，1996，「女子短大生の職業選択過程についての研究－進路選択に対する自己効力，就職活動，自己概念の関連から－」『教育心理学研究』44，195-203 頁。
 山口 洋，2001，『大学生の友人関係と進路選択に関する調査結果概要報告書』（非公刊）。
 ———，2003，「社会ネットワーク分析におけるデータ収集法の比較検討－個人間のネットワークデータを中心に－」『佛教大学社会学部論集』，36：105-119 頁。
 安田 雪，1999，『大学生の就職活動』，中央公論社。

〔付表 1〕 ロジスティック重回帰分析

| 説明変数 | 被 説 明 変 数 | | | | | |
|------------|---------------|--------|-------|--------------|--------|-------|
| | ①②進路未決定と③進路決定 | | | ②進路未決定と③進路決定 | | |
| | B | Wald | 有意確率 | B | Wald | 有意確率 |
| 将来志向* | 1.733 | 10.281 | 0.001 | 1.844 | 9.525 | 0.002 |
| 学科内友人数 | 0.437 | 4.271 | 0.039 | 0.285 | 1.652 | 0.199 |
| 年長者相談ネット | 0.498 | 7.905 | 0.005 | 0.522 | 7.618 | 0.006 |
| 授業出席率 | 0.609 | 4.276 | 0.039 | 0.454 | 2.025 | 0.155 |
| 性別* | 0.845 | 2.696 | 0.101 | 1.018 | 3.841 | 0.050 |
| 公募制推薦* | 2.669 | 5.904 | 0.015 | 2.464 | 5.023 | 0.025 |
| 3回生9月民間志望* | 1.435 | 8.817 | 0.003 | 1.378 | 7.145 | 0.008 |
| 定数 | -4.869 | 17.803 | 0.000 | -4.061 | 10.998 | 0.001 |
| N | 138 | | | 125 | | |
| カイ 2 乗値 | 59.249 | | | 46.427 | | |
| -2 LL | 126.339 | | | 113.159 | | |
| 自由度 | 7 | | | 7 | | |
| 有意確率 | 0.000 | | | 0.000 | | |
| 正分類確率 | 0.761 | | | 0.760 | | |

*印の説明変数は 2 値のカテゴリ変数，その他は全て量的変数

〔付記〕

校名や個人名は挙げられませんが，調査にご協力頂いた学生の皆さん，貴重な講義時間を割いて頂いた講義担当者の先生方に感謝いたします。また，様々な形でご協力頂いた大学関係者の方々にも感謝いたします。本稿に関する全責任が筆者にあることはもちろんです。

（やまぐち よう 社会学科）

2003 年 10 月 15 日受理